

はじめに

聞き取りを始めて3年が経ちました。「戦争」と言っても、各人のその時の立場、状況によって、感じ方や世界観は様々であるということを実感しています。

戦争の体験は、個人的に話すのはよいけれど、公にすることに対してためられることもあり、なかなか聞き取り作業が進まない、というのが現状です。そんななか、今回は3名の方の貴重な体験談を掲載することができました。

1人目の方は、中国でお父様が生死不明となった方で、驚くべきことを父親の元部下の方から知らされますが、確認することもできず、ただ父の無事を遠くより祈りながら日常を送られました。

2人目の方は、朝鮮北部でお父様がソ連軍に連れ去られ、残された母と妹と共に、厳しく危険な収容所生活を経て、命からがら帰国されています。

3人目の方は、15才で自ら志願して満州に開拓団として渡満し、終戦間際にソ連軍に連行され、シベリア抑留を2年間経験され、帰国されました。この方は、数十年の時を経て絵画を通してその体験を表現され始めました。その方の重みのある言葉をご紹介します。

自分自身『見、聞き』肌で感じたものを、そのまま表現したまでで、同情を求めるとか、被害意識を主張するものではありません。戦争には、勝者も敗者もなく、又加害者にもなり、被害者にもなるのが戦争です。その実態を目のあたりにしてきました。本展(シベリア抑留をテーマにした絵画展)を見ていただき平和の尊さを再認識するきっかけとなれば幸いです。

一般の方々が戦争という歴史の大波の中でどのように過ごしていたのか、ぜひ共有していただけたらと願います。

最後に、戦争で亡くなられた方に心より追悼の意を捧げ、戦争で愛する人を亡くした方々に仏の慈愛があらんことを心よりお祈り申し上げます。

合掌

平成29年8月立秋

蓮華寺副住職 浦山慈水

初めて中国を訪れる前夜、夢に現れた生死不明の父

元気でいてくれればそれでいいと願っていた

語り手 松岡源治さん(80)

福山市今津町在住

明治 39 年(1906)	父・松岡克己さん生まれる
大正 15 年(1926)	克己さん、満 20 歳の徴兵で中国へ召集される
昭和 12 年(1937)	克己さん二度目の召集。支那事変(日中戦争)に赴く
8 月	源治さん生まれる
昭和 15 年(1940)	克己さん帰還
昭和 16 年(1941)12 月	太平洋戦争始まる
昭和 19 年(1944)1 月	克己さん中国へ三度目の召集
昭和 20 年(1945)5 月 20 日	克己さん中国河南省で生死不明
8 月 15 日	日本降伏

松岡克己さんは今津町で「松岡*竹張工場」という従業員 10 名ほどの下駄の加工会社を経営していましたが、3 度目の召集で「生死不明」として帰らぬ人となりました。その肩書は「獣医」でした。



*かつて下駄の生産日本一を誇った松永地域。写真は、積み上げた下駄を背景に克己さんと幼い源治さんを含む。

おやじは 3 回中国へ送られました。

1 回目は 20 歳の徴兵の時です。その時は騎馬兵として訓練したようです。

徴兵制は、満 20 歳に達した男性を兵役(軍隊に関わる任務)にたずさわせるという、明治時代に打ち立てられた軍事制度で、終戦まで改正を繰り返しながら続きました。

克己さんが徴兵された頃の中国は、イギリス、ロシア、日本、ドイツ、フランスなどの国々と不平等な条約を結ばされ、領土を貸出したり奪われたりすることが続いていた

た。そして、約 300 年続いた清王朝が滅び、共産党・中国国民党・軍閥(私的軍事集団)が各地で勢力を伸ばし、「戦国時代」のような状態にありました。



(左)徴兵された
時の克己さん。
20 歳ころか。
(右)馬が整列し
ている様子



一方、日本は 1920 年代を通じて経済不況、農業不況が続き、1923 年の関東大震災で経済不況は本格化し、不況から抜け出すため、満州(中国東北部)での権利と利益をさらに拡大しようという動きが出始めたころでした。

克己さんが徴兵された 1926 年、中国では、外国からの不当な支配を排除することを目標にかかげる国民党が、国を統一するために軍閥たちと戦い始めます。危機感を覚えた日本は、1927～28 年、山東省に出兵し、国民党の軍(国民革命軍)と武力衝突しました。(山川出版『日本史』参照)

もしかしたら、克己さんは山東出兵に動員されていたのかもしれません。

2 回目の召集は支那事変(日中戦争)の時です。おやじは中国語が堪能でしたし、陸軍の中では獣医としての任務も果たしていました。獣医というのは馬が相手です。戦争の時、馬は物資を運んだり、移動手段として使われていました。

下駄工場の社長であった克己さんが馬の獣医の技術を身につけていた、ということに驚きを感じた著者は、改めて当時の馬の役割について調べてみました。

藤原彰著「飢死した英霊たち」青木書店によると、第二次世界大戦では、日本は欧米諸国に比べ自動車工業が発展途上の段階で、機動力・輸送力を大きく馬に頼っていました。1936 年度の軍事動員計画では、全軍 30 個師団、人員 148 万人、馬 35 万頭、つまり人員の約 4 分の 1 の馬が動員されることになっていたそうです。

日中戦争以後、陸軍兵力は拡大の一途をたどり、それとともに馬の動員や補充も次々に行われました。終戦間際には農村から根こそぎ馬を戦地に送りこみ、推計 50 万頭の馬が日本に再び帰ることができなかったといわれています。

おやじは昭和 12 年に中国に出兵し 3、4 年はむこうにいて、昭和 15 年に帰ってきました。私は昭和 12 年生まれなので、おやじが帰って来た時には私は 3 才でした。

克己さんが中国に送られた昭和 12 年、北京郊外で日本軍と中国軍の間での発砲事件が起こりました。それが引き金となり、宣戦布告のないまま日本と中国の間で戦争が始まりました。その戦いは日本が敗戦するまで実に 8 年間続いたのです。ただ、日本では「日中戦争」とはいわず「支那事変」と呼んでいました。

克己さんが戦場で持っていたという家族写真を見せてもらいました。お母さん、まだ赤ん坊の源治さんとお姉さん 2 人が写っています。



克己さんは一回目の中国派遣から帰還後、ミサ子さんと結婚し、2 人の女の子を授かっていました。日中戦争が始まったのは昭和 12 年 7 月です。源治さんは 8 月生まれなので、克己さんは初めての息子の誕生を中国で知らされたのかもしれませんが、生まれてまもない息子をあとにして戦場に発ったのかもしれません。この写真を見て、我が子の成長を何よりの励みにしていたことでしょう。

克己さんが 2 回目の召集から帰還した翌年、日本はアメリカとイギリスに宣戦布告し、太平洋戦争が始まりました。その頃、克己さんがどのような生活を過ごしていたのかは定かではないのですが、竹張工場の社長として、また、一家の長としての生活が戻っていたことでしょう。昭和 17 年には新たに娘さんも授かりました。

お父さんとの思い出

3 回目の召集までの約 3 年間。源治さんにとって、お父さんとの思い出はどのようなものだったのでしょうか。

おやじとの思い出は本当にわずかしかなかったです。

ある日、父の妹であるお婆さんが通う洋裁学校を訪ねて行ったことがあります。松永駅から汽車に乗って尾道まで行きました。おやじに手を引かれている時、下駄の音がカランコロンと鳴っていたのを覚えています。

他には、父が「魚釣りに行こう」と言って一緒にフナ釣りをしたことや、4才か5才の時、軍服を着たおやじの背中に背負われて「お父さんは大きいなあ」と感じたことを覚えています。軍服は皮服じゃなかったですかね。

他の人からおやじのことを聞いたこともあります。戦争から帰った人間は、地元の在郷軍人会に所属することになっているのですが、会の世話をよくし、とても「りりしかった」そうです。

また、中国で従軍している時、夜間軍が行進する時、暗闇でも後の者がちゃんとついて来られるように「におい袋」を身に付けたり、若い中隊長に、途中で休憩を取るようお願いしたり、時にはお酒をとることもすすめたりしていたそうです。下の立場の人にも配慮ができる人間だったようです。

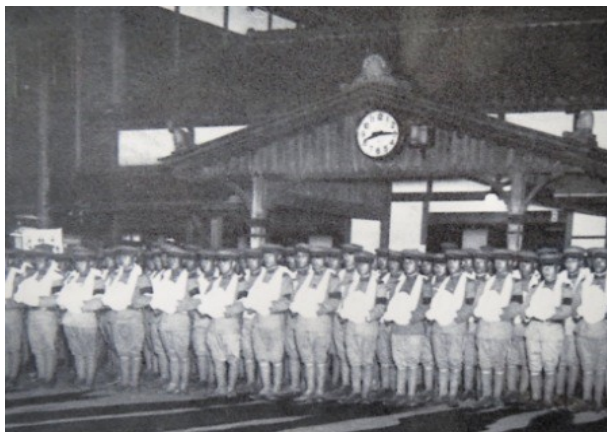
3回目の召集

昭和19年1月、克己さんに3回目の召集がかかりました。行先は3度目の中国です。克己さんが38才の時です。

「2回も帰ってきたのだから、3回目は大丈夫だ」

「絶対死ぬな。兵隊は要領だ」

親戚や町の人たちにそう言われておやじは送り出されていきました。



「白木の箱」で帰ってきた若者たち（福知山駅）

「2014 平和のための福知山戦争展」より

源治さんは小学2年生で終戦を迎えました。

8月15日以降空襲警報が鳴らなくなり、小学生同士で「日本は負けたらしいな」と話していたのを覚えています。

おやじの消息について知らされたのは、終戦1年後の昭和21年9月付けの戦死公報です。「生死不明」とありました。たしかその2年後くらいに遺骨箱を家族で尾道の大山寺に取りに行ったと思います。白い布に包まれた白木の箱を首にかけて、尾道駅から帰りました。

『松岡軍曹はいらっしゃいますか？』

家族が遺骨箱を受け取ったその年かあくる年、克己さんと同じ部隊にいたという人が尋ねてきました。

福山市在住で公務員をしていた人でした。『松岡軍曹はいらっしゃいますか？』と尋ねてきたのです。その人はおやじの最後を知っていたのです。昭和20年5月20日、おやじの所属する軍が(大きい川を渡る)『渡河^{とかわ}作戦』をしていた時のこと。荷物を渡す前におやじを含め5、6人で休憩をしていたら、中国人の民兵が突然襲ってきたそうです。川の手前にある一面のコーリャン畑(中国北部で栽培されるモロコシの一種)のなかに、おやじは民兵によって連れ去られました。軍はすぐさま渡河作戦を中断し、200名くらいで捜索したのですが、見つけることができなかったそうです。それが最後だったと。

訪れた人物も直接的に克己さんの最期を見届けたわけではなく、戦後も克己さんの消息を心に留め、ひょっとしたら生きて還っているかもしれないと想像していたのかもしれない。

生死不明ということで、母も私たちも、もしかしたら生きているのではないかという希望が常にありました。中国大陸から佐賀や長崎に引き揚げている人の中にいるんじゃないかと思っていました。やはり希望は消したくなかったです。

戦後、父親がいないということで、少年源治さんは厳しい現実にも直面することもありました。

戦争中は、軍人の家は、地域の人が田んぼを手伝ってくれていました。しかし、戦争に負けた日本は物資が不足し、みんな自分のことで精一杯でした。世間では、「戦争」

が悪い、「軍人」が悪い、という風潮があり、父親が戦争で戦った身内として肩身が狭かったです。

戦争で父親を亡くした遺児は、クラスに3から4名ほどいましたかね。小学校を卒業したら、会社に勤めながら学校にも通える制度を利用したかったのですが、片親ということで断念したこともあります。母親に内緒で高校を受験し、合格したら母親が反対しました。しかし、姉が応援してくれて入学することができました。

様々な苦勞を乗り越え源治さんは成長し、母親やお姉さんの援助を受けながら高校を卒業し、事業を興します。

父親は死んでいなかった

私の仕事のつながりで、大阪にいる、おやじの当番兵だった人と会う機会がありました。日本軍が独自に消息を調べたところ、おやじは民兵に連れ去られた後、共産党軍の捕虜となって、獣医か医師として共産党員になったのだと聞かされました。

その頃の中国共産党は技術者や専門職の人間が不足していたでしょうし、おやじは中国語も上手です。捕まえられたからといって、取り乱すような人間ではありません。

実際に克己さんが生き残っていたかどうかは調べるすべはありません。しかし、戦後も様々な理由で、戦っていた国に留まっていた日本兵が少なからずいたということは心に留めていてもよいのではないのでしょうか。参考までにベトナムの例をご紹介します。

終戦後も現地に残った日本兵 ベトナムの場合

2017年3月2日、天皇皇后両陛下は初めてベトナムを訪問した際、ベトナムで終戦を迎え、現地で根を下ろした元日本兵の家族と面会をされました。

日本経済新聞及び毎日新聞デジタル版によると、日本軍は太平洋戦争前の1940年から仏印(フランス領だった現在のベトナム、ラオス、カンボジア)に進駐。終戦時には9万人近い日本兵がいましたが、800人近くが帰国せず、約600～700人はベトミン(ベトナム独立同盟会)に合流し、フランスとの戦いにおいて、軍事教育を指揮したり、戦闘に参加したりしたといえます。

夢に現れた父親

平成12年か13年のことです。慰霊のため、初めて中国を訪問する数日前、夢におやじが現われました。宿まで父親が車で迎えに来てくれ、「よく来た」とねぎらいの言葉をかけてくれました。広い部屋に通してくれ、ご馳走でもてなしてくれたのです。十数

年以上前のことですが、その夢ははっきりと覚えています。今でも中国のどこかで生きているのでは？という思いがありました。元気であればそれでいいのです。

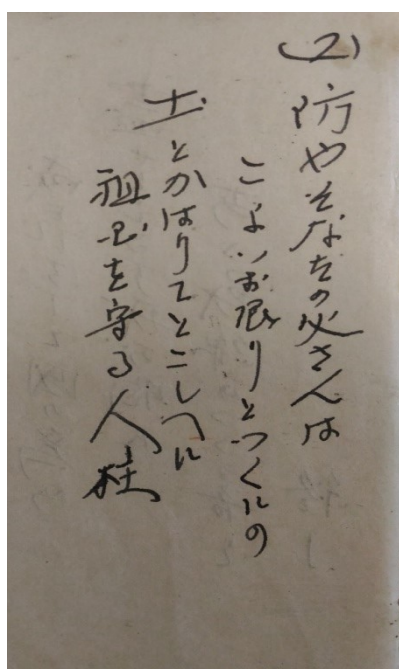
慰霊では、遺族たちが「お父さん、来たよ」とめいめいに語りかけます。おやじが亡くなったと思われる場所は、相変わらず一面のコーリャン畑で、私は列車の中から手を合わせ拝みました。

明治 43 年生まれの母親は、一昨年夏に亡くなりました。行年 106 才です。高齢にも関わらず自分の口で食べていて、頭もしっかりしていましたよ。施設の職員の人たちは「みさこさんはすごいなあ」とびっくりしていました。

戦後 4 人の子供を育て上げたミサ子さんが、夫の死の実感を得られぬまま、どのような気持ちで日々過ごしていたのでしょうか。今となってはその心中は推し量るしかないのですが、克己さんがどこかで生きていているかもしれないという希望が秘められていたのかもしれません。

戦争は犠牲者を生み出して終わります。勝っても負けても犠牲者が出ます。やはり戦争は避けなければなりません。

(平成 29 年 3 月 松岡さんの自宅にて)



克己さんの従軍手帳には、当時流行していたであろう軍歌がいくつか記されていました。(写真)
その一つを紹介します。
「月影淡き戦線の しばらくの暇に筆取りて
思いをはせる故郷の 老いたる父母よ幼児よ
坊やそなたの父さんは 今宵を限り外つ国の
土と変わりにて 永遠に 祖国を守る人柱
父もし亡くば母の手で 成長なして国のため
盡せと記すわが胸に ああ戦線の夜半の月」

幼少期を過ごした美しい場所—朝鮮半島北部

トイレに隠れていた父はソ連軍に連れていかれ、帰らぬ人に

語り手 中西^{ときこ}旻子さん（尾道市向島町在住）

- 昭和 15 年(1940)6 月 25 日 ^{へいあんほくどう そざんぐんそざんめん} 平安北道楚山郡楚山面(現在の朝鮮民主主義人民共和国の*慈江道)に生まれる
- 昭和 16 年(1941) 家族で父親の故郷(芦品郡服部村)に帰り、姉と兄を残して両親と旻子さんは北部朝鮮に戻る。
- 昭和 18 年(1943) 妹が生まれる
- 昭和 20 年(1945)8 月 父親がソ連軍に連れていかれる(その後消息不明)
妹が生まれる
- 昭和 21 年(1946) 収容所の生活後、引揚船に乗り母と妹 2 人で佐世保に上陸

*朝鮮民主主義人民共和国の北部内陸の地方。^{おうりょくこう}鴨緑江を挟んで北に中国と接する国

旻子さんの舞台



境地帯。年平均気温は 6℃あまりだが、1 月は -16℃, 8 月は 23℃と年較差が激しい。カラマツ、モミなどの^{しんようじゅりん}針葉樹林が^{はんも}繁茂する山林資源の宝庫。『世界大百科事典』参照

中西旻子さんは父親の仕事の関係で朝鮮半島北部に生まれ、幼少期を「自然に囲まれたとても美しい」^{おうりょくこう}鴨緑江という川のほとりで過ごし

た。その場所は、川を挟んで中国に接する、現在の朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の北の町です。この聞き取りは、著者の知人向井真珠さんが企画した旻子さんの戦争時代のお話し会と、旻子さんが記した手記を元にしています。

旻子さんが生まれた昭和15年、朝鮮半島は「日本」の一部でした(朝鮮半島の歴史については文末の補足を参照してください)。

旻子さんのお父様がソ連軍に連れていかれたのは、日本が降伏をした前後のことと推定されます。1945年8月8日、ソ連軍は日本に対して宣戦布告をし、翌日朝鮮半島北部も攻撃の対象となりました。その進攻の際、中国との国境近くの町に住むお父様はソ連軍に捉えられ、家族の元に帰ることはありませんでした。母親と子供たちはしばらく現地の収容所で過ごしたのち、いわゆる「引揚者」として日本に帰ります。

以下、中西さんの体験を紹介します。

私は五才の時に外地(北鮮―北朝鮮)からの引揚者です。あの玄界灘を越えて佐世保に上陸しました。そこで母は、父がシベリヤで亡くなった事を父の同僚から知らされたそうです。その人達は、収容所から逃げて日本に帰ってこられた、と聞きました。

私達は、昭和16年に、一度内地(日本)に帰ったそうです。が、その時に父方の祖母の元へ姉と兄を預けて、乳飲呑み子の私を連れて、再度、外地(朝鮮北部)に渡ったそうです。戦争が激しくなると予感してのことだったのでしょうか。朝鮮北部に渡らなければこんな事にはならなかったのに、と思いますが、(父親の)警察官という任務が、そうさせたのでしょうか。

美しい場所での幼少期

朝鮮北部にいたとき、終戦前は、父がいて、母が居て妹がいて普通に幸せな暮らしをしていたと思います。山には、白い花が咲き、野原に行けば紫いろの花が咲き、とてもきれいでした。白い花は芍薬、紫いろの花はあやめだったそうです。川原に行けば芹がはえ、トンボがとびかい蝶もいました。母は生前、「あんなきれいな所はもうないよ」と言っていました。大きな川があり、ポンポン船が行き来していました。おーりよっ河(※鴨緑江)だったようです。

北部朝鮮の警察官舎前にて。旻子さんが1才か2才頃(昭和16年か17年)



男性群の真ん中が旻子さんのお父様(兎玉覺一さん)、その左手にお母様(トシさん)。お母様の両脇に旻子さんの兄と旻子さん。下の段の右端が旻子さんの姉。当時の警察は、朝鮮の人と日本から派遣された警察官が共に職務についていたそうです。チマチョゴリを着ている女性もみえます。

現地の人たちとの交流

楚山面では、お正月には、着物を着せてもらって、父の同僚の人が来られると、白い紙に包んだお年玉を貰っていた覚えがあります。近所の朝鮮の人達にも、よくしてもらっていました。味噌の味のする、饅頭やおやきをもらったり、石の上で叩いて叩いて、やわらかくして焼いた物をもらったり、裏のおばあさんが、生糸をとっていたのでしょ、湯がいた繭^{まゆ}から糸車のようなものに糸をまきとるのです。そうすると蛹^{さなぎ}が出てくるのです。おばあさんがそれをくださるのですが、ゆがいてあるから食べられるのですが、私には、気持ちが悪くてあまり食べられませんでした。そして、果物だと思うのですが、甘くてとろけるような物、これは、とてもおいしかったことを思い出します。

近くに小川が流れていて冬には、寒いから氷が厚く張るのです。ソリのような物で近所の子達とわいわいがやがや言いながら滑って遊んでいました。

終戦間際の1945年8月8日、ソ連軍が日本に対して宣戦布告をし、翌日には朝鮮半島にも攻撃を開始します。

穏やかな生活も、終戦になってから、一変してしまいました。ある晩、父が玄関のあたりぐちに、腰を掛けて、ゲートルを巻いて出て行きました。私と母は、二人でそれを見送りました。小さい私にも、なにか、不安な気持ちでした。今までよくして下さっていた朝鮮の人たちも変わりました。日本人によくしたら自分の身があぶないからです。

ロシア兵が突然家に侵入 父に会えなかった妹

突然ロシア兵(ロシア兵)が家に侵入してきました。外の方では、銃声が鳴り響いていました。父は、お便所に入っているのを連れていかれたと、母から聞きました。そのままシベリヤに抑留されたのでしょう。私は、一週間位、御飯が食べられなかったそうです。

その時、下の妹は、母のお腹の中にいました。だから父の顔は、一度も見えていません。生まれた赤ん坊は、「カズミ」と命名されました。どこかの校長先生が「お父さんが帰ってきたら、いい名前を付けてもらいなさい」と言ってつけてくださったそうです。その父は、帰ってきませんでした。今も、寒いシベリヤのどこかに眠っているのでしょう。

「シベリア抑留」とは、戦争が終結したにもかかわらず、約 57 万 5000 人の日本人がシベリアを始めとする旧ソ連やモンゴルの酷寒の地において、乏しい食糧と劣悪な生活環境の中で過酷な強制労働に従事させられましたことを指します。

北朝鮮からは 6 万 6000 人の軍人、軍属の人々が強制連行されました。

寒さや食料の不足などにより、約 5 万 5000 人が亡くなったとされています。旻子さんのお父様もその 1 人でした。(平和祈念展示資料館『シベリアからの手紙』参照)

若い女性は身をやつす

若い女の人は顔に炭を塗ったりして、わざと汚い恰好をしていたそうです。私をかわいがってくださった「せつじょうのお姉ちゃん」と呼んでいた方が突然いなくなったのです。ロシア兵に連れて行かれたのでしょうか？無事に日本に帰っていられればいいのですが。日本の何処かに生きていてほしいと願っております。一度、逢いたい。

ロシア兵による没収・朝鮮の人も犠牲に

ある日、ロシア兵が、土足で家に上がり込んで日本人の女性になにかを言っています。その女性は、色の白い小柄のきれいな人でした。その女性の人は、泣いておられました。後で聞いた話では、缶の中に万年筆を隠し持っておられたということです。そんな物を持っていてもいけなかったのか、おどろきです。もちろん、写真も持っていてはいけなかった、と聞きました。幸い、我が家では、早く、内地(日本)に居る父方の祖母の所へ何枚か送っていてよかったのです。

ある朝、収容所の中が、えらい騒がしいのです。見ると年老いた男の人がよろよろと収容所の中から出てきたのです。その人は朝鮮の人だったそうです。その朝は、真っ白に雪が積もって、寒い日でした。積もった雪の上に血が落ちていました。その人は、なぜ日本人の収容所に入っていたのでしょうか。分かりません。

又、ある日は、収容所の庭を掃いていたら、おじいさんが「鶴だ」と言われたので見上げると鶴が並んで飛んでいました。声は、あまりきれいな鳴き声だとは思いませんでした。

襲われた収容所 赤ちゃんは置き去りにして隠れる

収容所にいたとき、夜、ロシヤ兵か現地の人か分かりませんが、襲撃をしてきました。収容所には、女と子ども、それに年寄りの男の人ばかり。若い男の人はいません。表に廻り、戸を押さえ「裏に廻ったよー」と言ってみんなで、わーわー言いながらまた押さえ、右往左往。すきを見て、母が私達を連れて裏の畑に逃げてくれました。赤んぼは、置いてです。赤ちゃんは、さらわれないのかと思いました。が、赤ちゃんを連れて出て鳴き声でもしたらいけないから置いて出たのかもしれない。もし、そうだとしたら、残酷ですよ。

私達は畑の隅の暗がりにも身をひそめていました。よく晴れて、星が空高くきらきらと輝いていました。そんな中、向こうの方に黒い人影がほのかに動くのがわかりました。母が「帰っていったね」とささやきました。私達は収容所にもどりました。赤ちゃんは、無事でした。

収容所での食事

「ずんばら」という草の根を掘って堅いのですが、かむとわずかに甘い汁が出るので、その汁を食べていました。桔梗の根は、さいて、きんぴらのようにして、母が食べさせてくれました。配給でもらった粉は、もう、いたんでいたのか、団子やお汁にしてくれましたが、すっぱくて変な味でした。

母は朝、早く、どこかの御飯炊きに行っていたこともあったようです。晩、帰ると、私と妹二人、冷たくなって寝ていたそうです。朝鮮では、「おんどる」といって床の下を炊いて部屋を暖めます。母が居ない時は私がたくのですが、小さい私には、いいようにはたけなかったようです。という訳で、母がいない時は、私たちは冷え切っていました。

母が私用に、リュックサックを縫ってくれました。子供用のリュックサックではありますが、その中に、配給でもらったカンパンやその他の食料を入れて移動していました。そうすると重さで背中に水ぶくれができてしまい、今でもにぎりこぶし位の傷が残っています。

す。母が私を「犠牲にした」と言ったことがありました。それは、私の傷跡を気にしての親心だったのでしょうか、女の子ですから。

日本で小学校に入学し、一、二年生の時は近い方の分校に通い、三年生になって遠くの本校に通いました。身体検査の時、上級生の女子が私の後ろに廻り、「ケロイド、ケロイド」と彼女たちに言われた事は、今でも忘れられません。知りもしないくせに、と思いました。

幼いながらも母親の代わりを

下の妹に、お粥を炊いて、おも湯をつくった記憶があります。ちゃんと炊けていたのか？火が消えたりしながら炊いたお粥ですから…収容所にいたときだと思うのですが、すぐ下に小さな川が流れていました。そこへガス灯（鼻をつくような、くさい臭いがしていました）の掃除や妹のおしめを洗いに行くのですが冬は川が凍っているので氷を割って、洗っていました。氷の下は、ちょろちょろと水が流れているのです。

3才の妹と一緒に赤ちゃんを背負って川を渡る

また、ある時は、母が農家の手伝いに行った時母の元へ赤ちゃんにお乳を飲ませに行きました。。私は赤ちゃんをおぶって川をざぶざぶと渡って行きました。上の妹がまだ三才。スカートをまくり上げて、あの川を渡ったのです。帰りには親指ほどの薩摩芋と小さく割ったしょうこん（松の根の肥えたもの）を貰って帰りました。あの小さな妹がよくぞ、あの川を渡ったと、思えば、今でもこみあげるものがあります。

収容所解放後、日本を目指して汽車に乗る

どこか、わかりませんが汽車が見えましたから、どこかの駅だったのでしょうか、そこには大勢の人でごったがえしていました。こくぼう色の服を着た若い男の人もたくさんおられました。思わず父の姿を捜していました。そこには父は居ませんでした。母がよく「えんきち、えんきち」と言っていましたから、そこから汽車に乗ったのでしょうか。汽車と言っても、貨物列車のようでした。途中で汽車が、平原に止まったのです。するとロシヤ兵が乗り込んできたのです。娘さんは顔を汚して、椅子に毛布をかけてその下に隠れていました。

引き揚げ船に乗り、佐世保へ到着

引揚げて来る時どこの港から乗ったのかは、わかりません。着いたのは、内地（日本）の佐世保と聞いています。引揚船の中では、よく、干した洗濯物が盗まれたそうです。赤んぼのおしめまでなくなるのです。母がよくなげいていました。引揚船では、配給の「おじや」をもらいに飯盒を持って梯子を下りて、もらいにいきました。引き揚げてくる途

中、夫婦そろっていたようですが、一人の子どもを川になげて死なせたと聞きました。母の知った人だったのでしょ。奥さんは、日本に帰られてから、発狂されたそうです。

佐世保から広島に帰る途中、暗い中を汽車が走っていたとき、母から「関門トンネル」と教えてもらった記憶があります。

バスで移動中、私は母と同じ方に座っていて、気がつきませんでした。向いに座っていたお婆さんが「赤ちゃんを抱いてあげなさい」と言われました。母が体調を崩したのです。長い間の疲れがでたのでしょ。無理ありません。

そうして帰ってきたところは、旧広島県芦品郡服部村（※福山市駅家町）という所でした。そこには、姉と兄と父方の祖母が待っていました。その夜、母の実家に皆でいきました。

下の妹は日本に引き揚げて来た時には、腕が親指くらいしかなかったそうです。叔母が「カスミちゃんが、よく生きたんよ」と言ったことがあります。今は、七十才。元気に生活しております。生き運があつたのでしょ。

ある日向こうの木立の方から賑やかな声が聴こえてきました。その日は、市が開かれたようで、そこで求めたのでしょ、珍しく母が海老の天婦羅を作ってくれました。御馳走でした。それをもらって、外にドラム缶があつたのですが、そこでその天婦羅を食べていたら、色の白い鼻の高い兵隊さんが来たのです。その人は、私に「ガム」をくれました。私は食べかけの天婦羅を差し出すと、その人はいい、というゼスチャーをして笑いながら去っていきました。アメリカの兵隊さんだったのかな？やさしい人でした。子ども心にも心がなごんだひと時でした。

姉は、両親と私だけが朝鮮に残り、自分と兄だけがおばあちゃんの家置いていかれたことがいつまでも心に引っかかっていました。「私は取り残された」とよく言っていました。何かあつた時に備えての両親の判断だったのだと思います。実際、子供を5人抱えて引き揚げていたら、(あの厳しい状況で)きっと誰かは欠けていたと思います。3人の子供だったから何とか帰って来られたのでしょ。

しかし、不思議なことに、私はあの収容所の生活も、引揚げも、辛かつたという思い出はないのです。もちろん、母は違つたと思いますが、..

母は最期は施設で過ごしました。「お母さんに置いていかれた」とよく嘆いていた姉は、自転車をこいで毎日母に会いに行っていました。

補足1(朝鮮半島の略歴)

現在、朝鮮半島は2つの国に分かれています。それ以前は千年以上にわたり統一国家の状態が保たれていました。

今から約 1300 年前に「新羅(シルラ)」王朝が朝鮮半島のほぼ全土を統一し、以降「高麗」「李氏朝鮮」が後に続きました。約 500 年続いた李氏朝鮮(1897年に「大韓帝国」と国号を変える)は 1910 年(明治43年)、「日韓併合」によって滅び、朝鮮半島は日本の領土になりました。その後、太平洋戦争において日本が降伏したのに伴い、北緯 38 度線より北はソビエト連邦(現在のロシア共和国)、南はアメリカ合衆国がしばらく管理をすることになり、その 3 年後、社会主義に基づいた北朝鮮と資本主義に基づいた大韓民国が成立しました。

補足2(シベリア抑留と北部朝鮮警察官)

日本統治からの解放後、ソ連軍進駐軍による統制を経て、平安北道の道政と警察一切は平安北道臨時人民政治委員会に引き渡され、警察権の委譲と警察官の武器弾薬の引き渡しが続けられました。北部朝鮮の特徴となったのは多くの旧総督府警察官僚が逮捕・抑留されたことです。行政委譲から数日以内に、人民委員会傘下の保安隊は、道庁の日本人幹部を逮捕しました。特に高等警察や諜報に携わっていた警察関係者に対する朝鮮人の取り調べは報復的性格の容赦ないものとなったと言われます。警察官と刑務官は原則として軍人と同じく捕虜扱いとなり、抑留警察官の総数は約 1800 人に達しました。彼らの多くは元関東軍兵舎に収容され、中国の延安収容所からソ連、満州各地に送られた場合もありました。(松田利彦著『日本の朝鮮植民地支配と警察-1905～1945 年』校倉書房参照)

補足3(海外からの引き揚げとは)

敗戦によって外地での生活のより所を失い、身に危険が迫る過酷な状況の中をぐり抜けて祖国に戻ってこられた約 320 万人に及ぶ「海外からの引揚者」の方々がいます。その途上でなくなられた多くの方々もいます。

とくに昭和 20 年(1945)8 月 9 日のソ連軍の満州侵攻(朝鮮半島北部含む)に伴う混乱と引揚げは困難をきわめ、言葉では表せない苦しくつらい状況が多々ありました。

旻子さん母子が引き揚げた佐世保港は、139 万人が上陸しました。

平和祈念展示資料館発行「満州からの引揚げ 遥かなる紅い夕陽」参照

「お国のために」満州へ開拓に その後シベリア抑留

満蒙開拓青少年義勇軍 回想録より

古谷巖さんは、19 才の時満州で徴兵され従軍。その数か月後には日本が敗戦し、シベリアに二年間抑留されました。

帰国後は大陸時代のことを語ることはありませんでしたが、退職後本格的に始めた絵画教室の先生から「貴重な体験を絵のテーマにしては」と促され、シベリア抑留を絵の題材に加えることになりました。「亡くなった戦友への供養にしたい」との思いを胸に、以降、数々の個展を開かれます。

「シベリア抑留」を題材にした絵画展の新聞記事を頼りに、著者は古谷さんと連絡を取り、数度お話を伺う機会を得ました。初めてお会いした時、カーブが勝てば我がことのように喜ばれる、非常にきさくで、明るくユーモアにあふれる方だというのが第一印象で、2 年間極寒の地で、いつ終わるとも知れぬ厳しい労働を強いられていたとは想像もできませんでした。古谷さんとの対話を通し、シベリア抑留の前に、15 才で「お国のために」自ら希望し、開拓団として満州に渡られていたということを知りました。

以下の記録は、古谷さんの了解を得て、平成 14 年に自費出版されたカラー画集「シベリア回想記」に加えられた「満蒙開拓青少年義勇軍」回想録を一部抜粋し著者が加筆したものです。絵や写真も引用させていただきました。ごくごく普通の少年がどのような思いで異国の地に渡り、どのように厳しい生活に耐えていったのかお読みください。

義勇軍応募の決意

時は正に風雲急を告げていた。

昭和6年(1932)満州事変勃発と翌年の満州国樹立、昭和 12 年(1937)日中戦争と、我が国は大陸への進出を意図し、国民の関心もしだいに高まっていた。

政府も、それを支援するため、昭和 12 年(1937)の秋、国策の一環として、「満蒙開拓青少年義勇軍」の募集を始めた。対象は、尋常高等小学校卒業生から徴兵検査を受けるまでの年齢の若者。

昭和 15 年(1940)私は(三原市)沼田東の生まれだが、当時は広島市に住み比治山の東にあった、段原の学校に通っていた。

県も国の要請に従い、各市町村役場を通して各々の小学校へ人員を割り当てる程の熱の入れようで、機会ある毎に校長も担任も担任も執拗に参加を勧誘していた。

ある時には、満州より一時帰省中の隊員を呼び、教壇に立たせた。彼は「天国の如き生活ができる。満州は日本男子の将来を選ぶ唯一の道である」と力説。そして、満州の雄大な風景や川には手で取るように捕獲できる魚がいるなど、少年の興味を呼

びそうな話を披露した。私達は、義勇軍本人の話だけにその憧れは一層高まり、応募の決意はますます固かった。

私の家族は全員反対した。「お前は身体も小さく到底義勇軍には不向きだ」と言うのがその大きな理由であった。

校長先生、担任の先生たちの勧めや家庭訪問による親への説得を通し、その年の暮れには、家族みんなの反対を押し切って、古谷少年は義勇軍応募への決意はできていました。15 歳のことです。

内原訓練所

義勇軍に入隊する少年達は、満州へ渡る前に、茨城県中部の内原訓練所で 2 か月の基礎訓練を受けることになっていました。出発前日、学校で壮行会が開かれ、「参加者には何か一言ずつ」と言われ、古谷少年は「男児志を立てて」の詩を吟じ「人生至る所に青山あり」と、満州に骨を埋める決意を表したといひます。

内原の訓練所では、農事と軍事訓練を受け、50 名近い隊員が「メザシを並べたように」寝ていました。農事訓練には食前作業があり、寒い朝、霜柱を踏みながら、鍬を担ぎ、義勇軍の歌を歌いながら畑を往復していました。軍事訓練は、元陸軍下士官の教官による軍隊式の厳しい訓練が行われ、希望者には柔道、剣道の課外授業があり、木刀振りでは手に豆ができるほど振らされたといひます。

高等小学校の生活から集団生活に一転し、緊張のうち 2 か月はあっという間に過ぎ、いよいよ満州に渡ります。渡満のコースは、各県出身の違いで 3 通りくらいあり、関西出身者は、内原～東京～郷土～門司～大連～現地というコースでした。

憧れの満州へ

東京では、皇居広場から宮城を遥拝し、坂下門から霞が関の官庁街を威風堂々と鍬の柄を担いで行進するのが、義勇軍の渡満時の習わしになっていた。街角には、多くの人が手に手に日の丸の旗を振り、出征兵士を見送る風景と変わる事はなかった。

東京を出発し、汽車は西へ西へと走り続け、岡山を過ぎ「広島県に入ったぞ」と中隊長が大きな声で皆に知らせていた。

二か月離れていても、故郷は懐かしい。

内原を立つ時は、郷土訪問について、こまごまと注意があった。詳しくは忘れ去ったが、要点は、無駄口・多言は慎め、物品を求めるな、姿勢は正しく、服装を乱すな等であった様に思う。

少年達は純真である。広島の前周の旅館に分宿し、家族との面会も、注意事項を厳しく守り家族に接した。

後日談として、その時の家族の感想は「子供子供と思っていたが、義勇軍という所は二か月間の短期間でかくも立派に成長するものか」と、感心すると同時にたのもしさを感じたとの事である。そして、我が子を義勇軍に送り出した事を大変誇りに思っていたとか。

九州の玄関口である門司に到着し、吉林丸という大きな船に乗り込み出航しました。瀬戸内海を出たことのない少年たちは、玄界灘の大きな波に揺られながら、好奇心と期待を胸に、東洋屈指の港のある大連に到着します。そして満州を目指して汽車の移動が始まります。

初めて汽車を眼前した時は驚いた。広軌(標準より広いレール幅)という事で、日本の汽車よりかなり大きく見えた。その汽車に乗り込み、一路北上の途につく。

車窓より眺める満州の風景は実に雄大であった。地平線に遮るものは何もない。所々畑らしきものは目に止まるが、行けども行けども大平原が果てしなく広がっていた。

かくして、目的地北安省鉄驪県鉄山包という小さい駅に止まり下車。

満州全土にある義勇軍訓練所の内、鉄驪は四大訓練所の一つで九個中隊で編成された大訓練所であった。

義勇軍の日課は、起床ラッパで始まり、朝の点呼がある。

小隊別に整列し小隊長が人員報告し、義勇軍独特な儀式「アッパレ、アナオモシロ、アナタシノ、アナサヤケ、オケ、スメラミコト」とか復唱し、朝の礼拝を終わるのである。いずれにしても、天皇を尊敬し、日本人たる自覚を深めるための行事で、夕方にも行

うのである。義勇軍独特の体操は「やまとばたらき」とっていた。



■歩 哨 義勇軍

食事にに関して、主食はコウリヤン。一見赤飯のように見えるけれども、口にするとぼろぼろと崩れます。おかずはヒジキの煮つけ、岩塩汁、乾燥野菜で「これは大変なところに来た」と、

落胆と同時に将来の不安が頭をもたげました。食の衝撃は大きく、慣れるまで時間がかかったということです。

虱に悩まされたり、目の病気や疥癬という皮膚病にかかっても近くに病院がなく、日々の作業ができない程の重症にかかる者もありました。

数ある勤務や当番で、少年達に嫌われていたものは衛兵勤務でした。

すべて軍隊式で、中隊の2つの門に、一時間交替で立哨(立って警戒の任にあたること)するのである。夏はブヨなどの小さな虫が寄って来て、目や鼻を襲う。頭から防虫網をかぶり立哨するのだが、満州の夏もやはり暑い。

夏より更に冬の酷寒の勤務は、命の縮む思いがする。特に夜中は電灯の無い北満では暗闇の世界と化す。

吹雪の舞う日もあれば、狼の遠吠えを聞く事もあり、心細い事この上ない。時には、地平線上に非賊の合図と思われる、のろし火が見える事もあった。一時間の立哨時間の長いのには参る。それに氷点下数十度という寒さが加わるのだからたまらない。

幹部の先生との交流 中隊長は元小学校の校長先生

中隊長は広島県安佐郡の出身で元小学校の校長先生、聖職を投げ捨て国策の義勇軍に参加されたわけである。私たちは名字からあだ名をつけて「チュウさん」と呼んでいた。

中隊長
銭原・学事

持延・農事
柞磨・軍事



他の三人の幹部は申し合わせた様にチョボひげをたくわえていた。中隊長はない。私達は「中隊長も口ひげを」と軽口を叩くがニッコリ笑って聞き流されていた。口ひげの有無で人物評価は愚かであるが、中隊長は至って地味で控え目な性格の様にお見受けしていた。

義勇軍の前宣伝と現実との大きなへだたりに中隊長とて大きな衝撃を受けられたと思うが、何時も冷静な判断力を発揮され、物事をテキパキと処理されていた。中隊長は詩吟の名手で、随意隊員を集め詩吟の指導をしておられた。

私は兵隊に行き、(鉄麗訓練所後に移ったソ連との国境沿いにある)開拓団には不在であった。その開拓団は敗戦となるや原住民は暴徒化し開拓団を襲撃、団員は散り、バラバラとなり逃避行を日夜続けた。逃避行中、中隊長は敵の銃弾に倒れ、帰らぬ人となられた。心より冥福を祈りたい。

脱走

あまり芳しくない話だが、鉄麗訓練所で名をあげた我が高瀬中隊にも、不本意な脱走事件がおきていた。

人数にして20～25名いたように覚える。その大半は広島市出身が占めていた。脱走第一号は私と同窓のS君で、ハワイ生まれ、彼は両親をハワイに残し、広島のおじさんの家から通学して、例の義勇軍勧誘の甘い言葉に乗せられ参加した。

彼は裕福な家庭に育ったようだ。恐らく満州の厳しい環境に想像以上の衝撃を受けたのが脱走につながったと思う。

義勇軍には現金の支給はなく、脱走資金は官給品の衣類を売ってこれを当てていた。そして残る隊員は脱走を支援する習わしがあり、いくら厳しく叱られても、脱走は後を絶つことはなかった。

いよいよ開拓団へ移行 朝鮮の人達の土地を買い取り、入植

昭和19年(1944)2月、私たちは鉄麗訓練所での訓練を終え、開拓団へ移行することになった。

いよいよ、理想郷の建設への第一歩を踏むわけである。移行先は、ソ連との国境に近い東安省虎林県忠誠という所。ここが私たちの永住の地になるのである。この忠誠の地は、元朝鮮の人達が先祖代々住んでいた、小さな集落であったのだ。

関東軍の意向により、こんな国境近くに朝鮮人が住んでいたは国防上よろしくない、

というのがその理由。拓殖務省が買い取り、代わって私達が入植したわけである。買い取りとは表向きで追い出したと言うのが真相のようである。

朝鮮の人達が、昔から営々と築いてきた土地を離れるのだ。悔しさ、情けなさで涙も枯れたと思う。また新しい土地を求めて一からやり直し。ろくな農具もなく大変な苦勞が待っていただろう。



■ヤン草 義勇軍

開拓団は虎林駅から 10 キロくらいあったおうか、大平原の中にポツンとある集落で、一番近い満人部落でも、2 キロ以上離れていた。当地は雑木はなく、文字どおりどちらを向いても、果てしなく広がる大草原であった。

ここが、少年たちが夢にまで見た満州の新天地だが、匪賊やスパイの横行が激しく、開拓団には憲兵隊が 4, 5 人常時駐屯していた。

早速、日本から父親を呼び寄せていた隊員もいた。

生活で一番困るのは燃料である。その燃料は、周辺に茂るヤン草を刈り取り山に積んで置くのである。草だけに火持ちが悪く、飯炊き当番は、一度火を付けたら離れられない。少しでも火持ちを良くする為に固く束にして燃やしていた。

建物は元の住民たちが使用していたものを引き継いだが、粗末な木材で骨格を造り、草に泥を含ませた壁で家というより小屋であった。

開拓団では、常時お米であったが、量が少なく毎食水を多く入れ量を増やし、雑炊というメニューだった。何時も腹が減るのでトウモロコシを食べていた。当時の満州の人達は、トウモロコシが主食で、それを作る畑は日本と比べて、けたちがいに広い。

私の開拓団での生活は一年と少しで、その後軍隊へ入った。

あこがれの関東軍へ入隊「これで一人前の男になれた」

昭和 20 年(1945)5 月、私は関東軍の公主嶺歩兵部隊に入隊した。

普通だと、もう一年開拓団での生活があるわけだが、一年早く徴兵検査が行われた。戦局は、我が国に不利に展開していたので、兵力増強のため、二年分を一度に検査したようだ。



私はひそかに恐れていた事があった。それは体が小さかったもので、徴兵検査は通らないと思っていた。だが合格という事が分かり「これで一人前の男になれた」と叫んだ。

私は軍隊に行けば二度と生きては帰れまいと思い写真をとって故郷に送っておこうと思い立ち、畜産班の馬車に便乗させてもらって一日がかりで、虎林街の満人の経営する写真館にいった。よそ行きも、普段着も区別のない装いで、地下足袋に乗馬ズボン、ボタンはキチっとはめておけば良かったと後悔している。

入隊以来、主として対ソ戦を想定し、敵戦車に肉弾で飛び込む訓練などを行っていた。戦車の死角は裏面で、側面は厚い鉄板で覆われ強靱である。真正面から地を這うように飛び込むのであるが今思えば無謀な作戦である。当時は、軍人勅諭の論す「死は鴻毛の軽き」で、みんなお国のために死を恐れる者はなかった。私も当然その覚悟は出来ていて「よし、やってやろう」と意気込んでいた。

そんなさなか突然「ソ連軍満州侵攻」のニュースが入った。8月7日頃だったと思う。私達の部隊も、完全武装で国境へと向かった。しかし、戦うこともなく敦化という所で敗戦を知らされ吉林で武装解除をした。

終戦

昭和20年(1945)8月15日、終戦である。

日本の敗戦が分かると、以前住んでいた朝鮮の人達が一挙に暴徒化し、手に手に鎌やホークや鉈^{なた}などを持って、今まで積み積もった怨念を晴らすべく、開拓団を襲撃してきたという。死傷者もかなり出て、ここに夢見た王道楽土の第二の故郷建設の使命は散り果て、開拓団は終焉した。全満の開拓団員、義勇隊員は棄民と化した。

私は丸腰になり、一か月近くも満州の広野をさまよい歩き、9月にソ連アルタイ州ピースク市の収容所へ抑留された。そこで、2年近く「寒さ・飢え・重労働」の三重苦の捕虜生活を送った。

そして、昭和22年(1947)5月、舞鶴に復員した。

私達は丸裸で帰ってきたが、何事にもくじけない忍耐力、精神力を身に付け今日まで生きてきた。

元拓友と交わす年賀状に「義勇軍魂今も健在なり」と書いている。

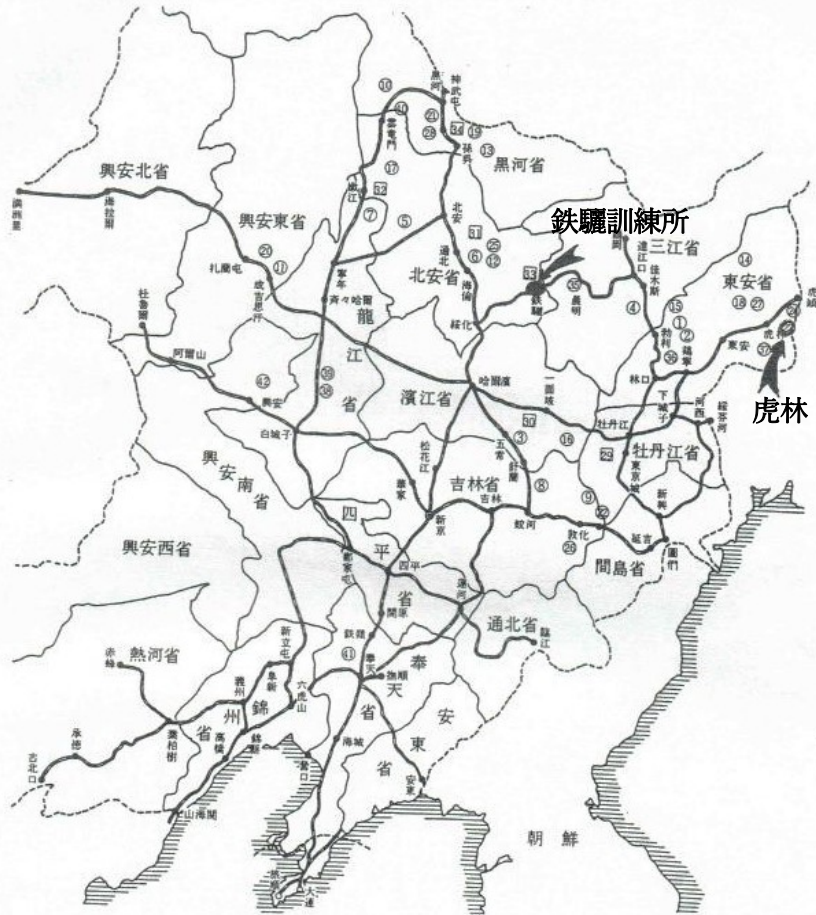
亡き拓友の冥福を心より祈りたい。

古谷さんは「おわりに」で次のような言葉を述べられています。

何分とも半世紀以前の表現となれば、記憶も定かでなく、思い違い勘違いの類や、不適切な表現もあると思いますが、そこはご諒承賜りたいと思います。(中略)

満蒙開拓青少年義勇軍などと今どき話題としても関係者以外にはご理解を得られないと思います。壮言をお許し願えれば、国策のもと若い情熱を大陸に捧げ、志半ばにしてシベリアの凍土に埋った多くの拓友の存在を明らかにしたい気持ちもありました。

広島県満州開拓青少年義勇隊入植図



凡例

○ 義勇隊開拓団 □ 訓練所

- | | | | |
|-----------------|-----------|------------------|--------------|
| ① 第一次万竜義勇隊開拓団 | (萩野中隊) | ②② 第三次八家子義勇隊開拓団 | (渡辺中隊) |
| ② 第一次大隅義勇隊開拓団 | (佐藤中隊) | ②③ 第四次忠誠広義勇隊開拓団 | (高瀬中隊) |
| ③ 第一次光世義勇隊開拓団 | (伊藤中隊) | ②④ 第四次広仁義勇隊開拓団 | (中尾中隊) |
| ④ 第一次大林義勇隊開拓団 | (矢上中隊) | ②⑤ 第四次備後義勇隊開拓団 | (川井中隊) |
| ⑤ 第一次昭明義勇隊開拓団 | (武藤中隊) | ②⑥ 第五次日高義勇隊開拓団 | (福田中隊) |
| ⑥ 第一次万順義勇隊開拓団 | (中山中隊) | ②⑦ 第五次完達嶺義勇隊開拓団 | (鶴殿中隊) |
| ⑦ 第一次寛溝義勇隊開拓団 | (吉川中隊) | ②⑧ 第五次团山義勇隊開拓団 | (世羅、竹城中隊) |
| ⑧ 第一次双葉義勇隊開拓団 | (池田中隊) | ②⑨ 第六次寧安義勇隊訓練所 | (菅田中隊) |
| ⑨ 第一次昭光義勇隊開拓団 | (研谷中隊) | ③① 第六次一面坡義勇隊訓練所 | (井岡中隊) |
| ⑩ 第二次山神府義勇隊開拓団 | (篠根中隊) | ③② 第六次対店義勇隊訓練所 | (橋高中隊) |
| ⑪ 第二次成吉思汗義勇隊開拓団 | (兵藤中隊) | ③③ 第七次嫩江義勇隊訓練所 | (平原中隊) |
| ⑫ 第二次広根義勇隊開拓団 | (丹野・辻中隊) | ③④ 第七次鉄驢義勇隊訓練所 | (石田中隊) |
| ⑬ 第二次大公河義勇隊開拓団 | (間瀬中隊) | ③⑤ 第七次孫呉義勇隊訓練所 | (桑田中隊) |
| ⑭ 第二次大和鎮義勇隊開拓団 | (小林、野村中隊) | ③⑥ 第三次晨明義勇隊開拓団 | (鏡河少年隊) |
| ⑮ 第二次北星義勇隊開拓団 | (高橋中隊) | ③⑦ 第三次北樓義勇隊開拓団 | (古屋、豊永、堀田中隊) |
| ⑯ 第二次三道冲河義勇隊開拓団 | (高橋、西村中隊) | ③⑧ 第三次凌雲義勇隊開拓団 | (佐藤中隊) |
| ⑰ 第二次弥千代義勇隊開拓団 | (小野寺中隊) | ③⑨ 第四次武蔵義勇隊開拓団 | (久保中隊) |
| ⑱ 第二次完達嶺義勇隊開拓団 | (高橋中隊) | ④① 第四次宝竜義勇隊開拓団 | (小川中隊) |
| ⑲ 第二次勝武義勇隊開拓団 | (崎園中隊) | ④② 第四次葵義勇隊開拓団 | (湊口中隊) |
| ⑳ 第二次豊春義勇隊開拓団 | (喇叭鼓隊) | ④③ 第五次奉天満鉄義勇隊訓練所 | (岡田、長田中隊) |
| ㉑ 第三次团山義勇隊開拓団 | (玉木中隊) | ④④ 第三次万宝義勇隊開拓団 | (川村中隊) |

謝辞

今年も聞き取り冊子を作成することができたのも、皆様のおかげです。

松岡源治さんとの聞き取りは、今津町遺族会との交流がご縁で実現しました。自坊での「戦争体験を聞く会」でお話しをしてくださることも快く引き受けて下さりました。

旻子さんのお話し会は、筆者の知人である向井さんが町内清掃の時に旻子さんの引揚げの事実を知ったことがきっかけとなりました。向井さんの呼びかけによって本田夫妻の自宅を開放して行われました。聞き取りの補足資料にもあるように、満州、朝鮮北部からの引揚げは困難を極めたと言われています。旻子さんはためらいを感じながらも、記憶をたどりながらお話ししてくださいました。

古谷さんは、新聞記事を頼りに著者が面会を申し出ました。唐突な依頼にも関わらず、快く応じてくださり、体験談を語って下さいました。この度も、回想記の掲載依頼には、励ましの言葉と共に快諾してくださいました。三原市の画廊喫茶「赤とんぼ」さんには対話の場所を提供していただきました。

また、冊子の無料配布は、蓮華寺檀信徒様のご浄財を元に行われています。

この冊子を作成するにあたり、協力してくださったすべての方々に心よりお礼申し上げます。

合掌